

1 穂高

穂高は安曇野市の北西部に位置し、燕岳から常念岳へと連なる北アルプスを源とする中房川と烏川の扇状地によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、西側山麓は松林、平地の中央部は水田、扇端の東側は湧水に恵まれわさび田やニジマスの養殖池が広がっている。穂高には水田の中に規模や種類も様々な数多くの屋敷林が点在し、北アルプスを望む田園風景の中の重要な景観要素となっている。



1-1 あらや 新屋 白壁の土蔵が並ぶ屋敷林

安曇野市穂高有明



白壁の蔵が並ぶ屋敷林



赤沼千史宅の母屋と屋敷林



赤沼千史宅の蔵は音楽スタジオに改装されている

「新屋」という地名の由来は、中世までの古厩郷ふるまやを母村として開発され、近世に独立した村という意味である。地勢は、燕岳を源流とする中房川扇状地の扇頂・扇中部に位置している。

古くからの開発があったと思われ、西の山麓沿いに穂高古墳群に含まれる古墳が8基存在する。そのうちの1基は、坂上田村麻呂に成敗されたという八面大王の伝説を伝える魏石鬼岩窟ぎしきのいわやである。

明治に入って周辺の村と有明村を構成したが、新屋はその中心地となり、小学校や郵便局・駐在所、後には農協なども置かれた。

新屋には、国の重要文化財に指定された曾根原家住宅がある。この住宅は17世紀中期から後期にかけての建築とされ、本棟造が確立する前の、石置板葺いしおきいたぶきで切妻平入ひらいりの民家建築である。

赤沼千史宅の屋敷林

赤沼千史宅は、東側に美しい白壁の土蔵が2棟あり、その間を行くと屋根が高い、総二階建ての大きな母屋がある。煙出しの小屋根が上がり、かつては養蚕を営んでいたことが知られる。



北側から屋敷林を見る



真正面には有明山が見える 左が赤沼淳夫宅の塀。



赤沼淳夫宅の庭の美しい紅葉



赤沼千史宅の入口

赤沼淳夫宅の屋敷林

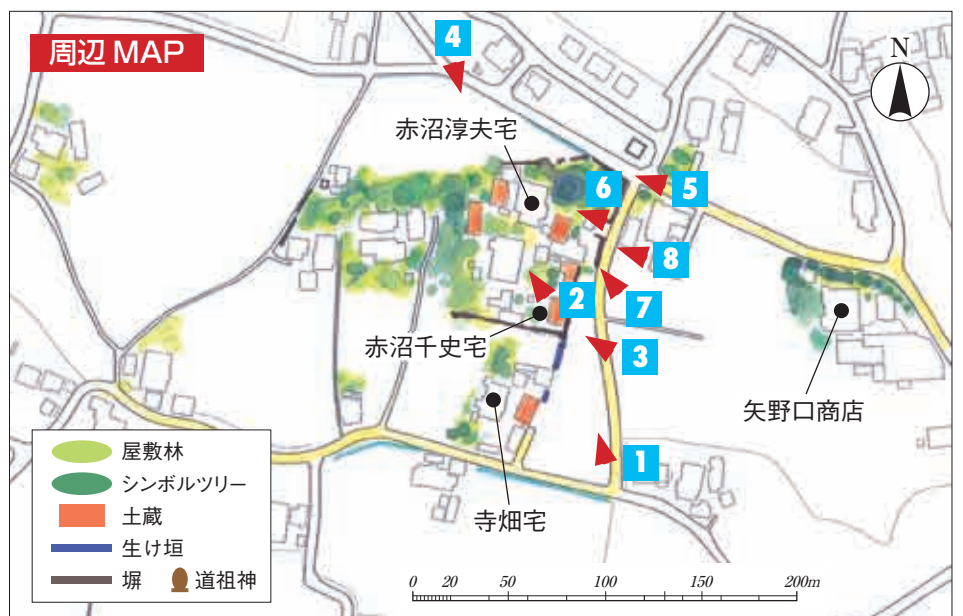
赤沼淳夫宅は、広域農道から西側にやや離れた場所に位置し、静かなたたずまいの中にある。屋敷林は、周辺の数軒の家の樹木が一体となって、北側を中心に配置されている。北側から見ると森のような大きな屋敷林である。

樹種は、カエデ・イチョウをはじめとした落葉広葉樹が多い。南側には、カキなど果樹が見られる。また赤沼淳夫宅の門は諏訪片倉館の迎賓館の門を譲りうけたもの。碌山美術館の設計者今井兼次氏がよくここを訪れた。

屋敷林に囲まれた母屋と、内部を改装した土蔵がある。入口には塀や門がある。東側から北側にかけては、近年美しい塀が造られ、屋敷林とともに背景の有明山や北アルプスと非常によく調和している。



赤沼淳夫宅の門



1-2 古厩^{ふるまや} 有明山を背景にした屋敷林

安曇野市穂高有明



最近まで天蚕を続けていた中村宅のたたずまい



吉田宅の母屋 2棟並んだ土蔵の間を入ると築170年余りの切妻平入、亜鉛鋼板葺きの母屋がある(改築前は板葺き)



堀屋敷跡の北に位置する吉田宅の池(旧穂高町景観賞受賞)

古厩という名は古代の厩^{うまや}に由来するもので、安曇野唯一の厩家を示す地名である。松本から越後糸魚川に向かう古道の千国道沿いに古代の厩家があったのであろう。

中房川扇状地の扇端に位置し、北から東側に中房川と乳川^{ちがわ}が合流した乳房川が回り込んでいる。中房川から取水した農業用水の北堰が立足・古厩地域の149[㍊]を灌漑する。その開削は中世末の天正・文禄年間(1573～96)の頃といわれている。

仁科氏の支族とされる古厩氏は、古代からの集落を受け継いで郷町を造った。その町並みの長さはおよそ2町(約200[㍊])余で、南北に鍵の手が設けられている。古厩氏はこの郷町中央の西の背後に堀屋敷をつくり、居館としていた(古厩氏居館跡)。

有明の天蚕

古厩村をはじめとした有明地区の特産品に天蚕がある。天蚕は「やまこ」とも「やままい」とも呼ばれる日本原産の野蚕で、山野でクヌギやナラなどの葉を食べて繭をつくる。緑色の繭から取れる天蚕糸は優雅な光沢を持ち、「繊維のダイヤモンド」とも



左は江戸時代の古厩村の郷倉



旧郷町沿いの生け垣



百瀬宅の塀と屋敷林



百瀬宅の門かぶりの松



中村宅の天蚕用の籠

呼ばれ貴重品とされてきた。

天明年間（1781～89）から、篤志家が家蚕とは別に天蚕の卵を採取し飼育を始めたと伝えられる。明治30年ころが最盛期で、京都西陣・岐阜・新潟・桐生・足利などの機業地に送られ名声を博した。

古厩の屋敷林

古厩の屋敷林は堀屋敷跡周辺と、その西方約500mほどまでにあり、旧郷町沿いには生け垣と一体となった樹木群が古道の雰囲気を残している。

乳房川の土手から望む有明山を背景とした古厩の屋敷林は美しい。

近世の古厩村の年貢米を保管した郷蔵は、近くの庭先に移築され再利用されている。



しましんでん 1-3 島新田 茅葺の民家のある屋敷林

安曇野市穂高北穂高



武井姓4軒の家で構成された屋敷林



茅葺の民家を再生した武井孝夫宅の母屋



増築された別棟 白と黒のシックな外壁である。

島新田村は、江戸中期に編纂された松本藩の地誌『信府統記』によると、青木新田村の川上に開発されて、慶安2年（1649）に青木新田村から分村している。江戸前期に全国的に大規模な開発が進んだ時期に成立した新田村の一つである。

開発が遅れた理由としては、高瀬川と穂高川に挟まれた島状の地帯であるため、洪水の被害が大きく農地に適さなかったことが考えられるが、堤防工事などによりこうした氾濫原にも水田が作られるようになったのであろう。

明治以降は北穂高村を経て、昭和戦後穂高町となった。昭和43年には農事組合法人「北穂高農業生産組合」が設立され、農業構造改善事業により圃場整備が実施された。整然とした田圃は大型農業機械による稲作が可能になったが、この地を通っていた糸魚川街道（千国街道）は部分的、断続的にしか確認できなくなってしまった。

糸魚川街道が池田通りと松川通りに分岐する付近を追分といい、JR大糸線の安曇追分駅はこのことに因んでいる。分岐点付近に置かれていた石碑には



2棟建つ土蔵が美しい



北側の屋敷林



武井孝夫宅の西側 JR大系線に面しており、低い塀と倉庫が配置されている。



生け垣の手入れも行き届いている

「右大町みち 南無阿弥陀仏 左松加わ（松川）」と刻まれていたが、道路拡幅により現在は島新田会館の前に移されている。

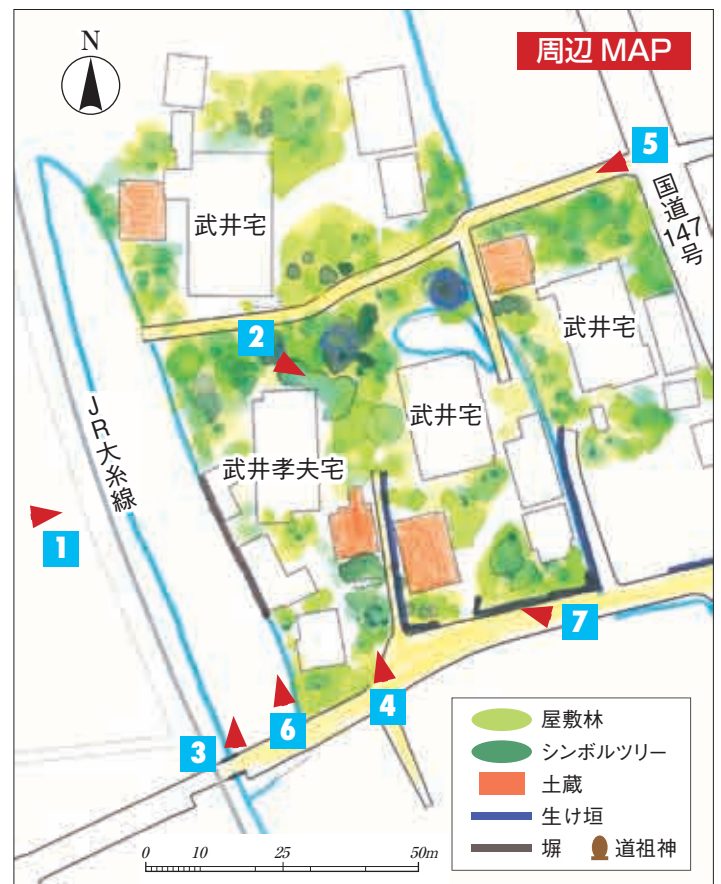
新島田の屋敷林

島新田の屋敷林は追分周辺に残っている。中でも追分の北西方（松川村方面）約200㍍に存在する武井姓4軒の家屋周辺はみごとである。1区画約2,000平方㍍（約600坪）程度あり、石垣・生け垣・竹垣・路地などで区画されている。樹木は主として北側と西側に配置され、樹種はケヤキのほか、ヒノキ・スギ・マツ・コウヤマキなどの針葉樹が多い。

その他にも追分の前後100㍍には土蔵や屋敷林の面影が残る家が散見される。

武井孝夫宅の屋敷林

母屋は築160年ほどの茅葺寄棟造の民家を再生したものである。湿気対策のための基礎のかさ上げや軒の切りつめなど、通風・採光に工夫して快適な生活ができるように改修されている。増築された別棟の外壁は黒塗りの板壁と白の漆喰壁で、母屋との調和にも気配りが見られる。



こいわたけ 1-4 小岩岳 小岩城址につながる屋敷林

安曇野市穂高有明



中世の城下集落の雰囲気が残る静かな通り



小岩岳公民館と大きなケヤキの森



伊藤宅の古い井戸

小岩岳（小岩嶽とも表記する）には、中世古厩郷の領主古厩氏が築いた山城の小岩岳城がある。その麓には城下集落が営まれていて、小岩岳の集落を囲んで二重の堀が巡らされていた。

天文19年（1550）府中（松本）に攻め込んだ武田晴信（信玄）は、小笠原長時を追い、松本平と安曇野をほぼ手中にしたが、この小岩岳城はその後も抵抗を続け、2年後の天文21年末についに落とされている。武田家臣の駒井高白齋が記した『高白齋記』にはその激しい戦いの様子が詳しく載っている。

地勢は西山の山麓に立地し、藤尾沢（富士尾沢）・天満沢の沢水を利用して開かれた集落である。地域内には大門遺跡など縄文時代の遺跡や、古墳が点在し、古くから人が住んでいた地域である。本格的な開発は古厩氏によるものと推定され、古道の千国道が集落を通り、宿城的機能を担っていたと考えられる。

江戸時代はたけのす嵩下村を構成し、明治以降の有明村を経て、昭和戦後穂高町となった。昭和47年（1972）からこの地の山麓一帯が、中房から引湯した穂高高



生け垣の連続する静けさ



矢野口宅の屋敷林と本棟造の家



伊藤宅の屋敷林と古井戸



伊藤宅と小島宅の屋敷林

原温泉郷として開発され、温泉付別荘や旅館が建ち並んだ。

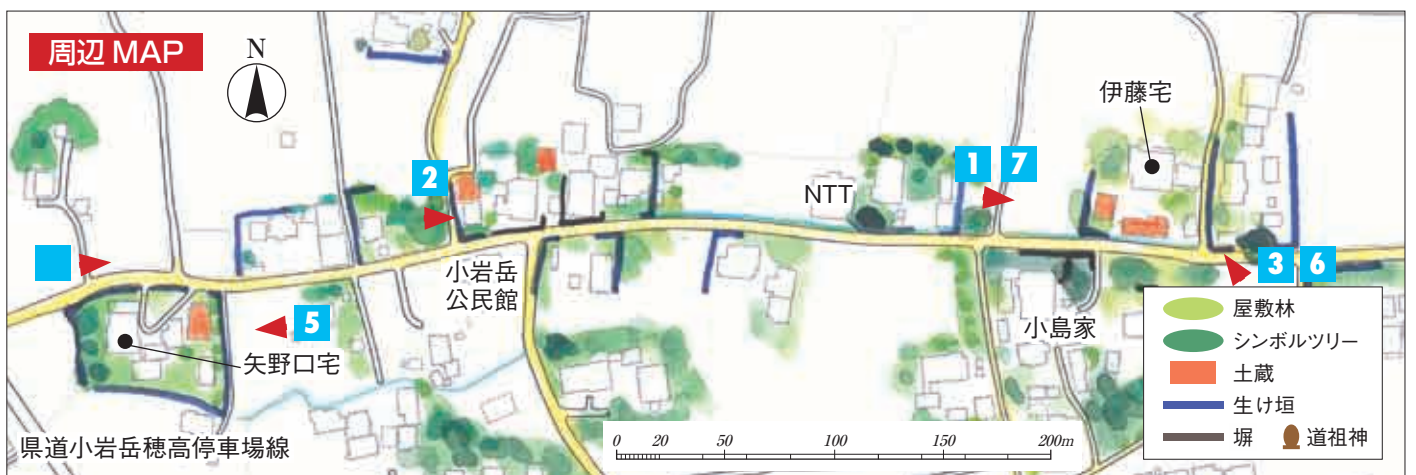
小岩岳の屋敷林

小岩岳の屋敷林は、小岩岳城址へ続く大手道沿いにあり、元は配下の武士たちの屋敷であったためか、一軒当たりの規模が大きい。また、他の集落とは異なり、間に田圃を挟みながらも、屋敷が房状に配置されていることが中世の城下集落の特徴といえる。屋敷林はスギなどの針葉樹が比較的多く、樹高も高

い。敷地の全方向に配置されている家が多く、集落全体で深い屋敷林を構成している。

本棟造の建物

集落内には、大規模な本棟造の母屋、美しい土蔵や土壁の塀などが多く見られる。茅葺寄棟の母屋もある。現在畜産を営む伊藤宅の母屋は、かつて養蚕の桑を収納したであろう地下室を備えている。山麓線近くの矢野口宅には、大きな本棟造の母屋があり、背景のスギを中心とした屋敷林との調和が美しい。



1-5 みみづか 耳塚・はしづめ 橋爪 緑のトンネルをなす屋敷林

安曇野市穂高有明



生け垣と屋敷林に囲まれた大通り



林芳郎宅の屋敷林 昭和10年(1935)の大火事の際は防火林となった



中央は大きなエノキ

耳塚は中房川扇状地の扇端部にあり、中房川水系の油川や中沢北堰が流れ下っていて、古代から農耕の適地であった。耳塚公民館付近からは弥生土器片ちがわが出土している。乳川の河岸段丘上の良田地帯に開拓された、耳塚・古厩・立足の集落を通る古道が千国道の一つと考えられている。

耳塚の名の由来は、集落の南東にある径10程ほどの塚にある。これを地元では、坂上田村麻呂に成敗された八面大王の耳を埋めた塚と伝えているが、実際は穂高古墳群に含まれる円墳の一つであろう。

江戸時代には単独で耳塚村を構成していたが、租税もきつく、農業だけでは生活が困難なため、流木の処分や薬草掘り、新切(開田)事業などで生活を維持していたようである。

橋爪村は千国道が烏川を渡る付近に中世から存在し、江戸初期には4軒の小村であったが、安政2年(1855)の書上では37軒に増えている。しかし、ここも烏川の洪水に悩まされた村であったようである。

明治5年(1872)戸長制の実施によって耳塚の個人宅に戸長役場が開かれ、明治7年には周辺の諸村



4 県道沿いの歴史のある林幸夫宅



5 北から耳塚の屋敷林を見る

と合併して有明村となった。その後、大正5年(1916)に新屋に役場を新築移転するまで、耳塚は有明村の行政の中心地であった。

耳塚・橋爪の屋敷林

耳塚・橋爪の屋敷林は、主要地方道の塩尻鍋割穂高線が乳川を渡った西側の道沿い両側と、それと交差する南北の古道沿いに見られる。茅葺屋根の民家もある。耳塚公民館の前にあった道祖神は香取神社の境内に移された。西の外れには耳塚堂などがある。



6 中島宅の落ち葉の処理



7 林幸夫宅の土蔵の軒に吊るされた天蚕用の籠往時を偲ばせる



8 土蔵の残る裏通り



9 生け垣と石積みの残る大通り



はらきど 1-6 原木戸 ハナノキもある屋敷林

安曇野市穂高北穂高



敷地の南東の隅にあるケヤキの古木は原木戸のランドマークになっている



臼井宅の手前は以前わさび田であった



圃場整備された農地は縦横に水路が整備され、農道からは水路に架けられた橋を渡って田圃に入る

原木戸集落のある北穂高の^{あおけみ}青木花見村と、その北に位置する島新田村は、穂高川と高瀬川の間にある中洲の上に発達した村である。

安曇野市の他の地域は農業用水の確保に苦心したが、この地域は低湿地のうえ高瀬川の水害を被ることが多く、農地の維持に苦労することが多かった。寛政元年（1789）の水害が最たるもので、多くの人が故地を捨てて穂高川対岸の貝梅村などへ住居を移している。

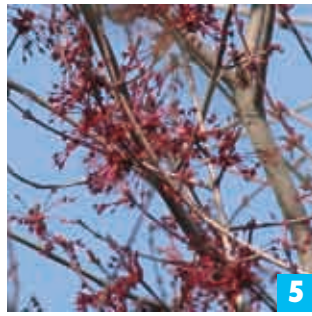
松本から糸魚川へ至る道を「糸魚川街道」と公式に称するのは明治20年代からであったという。江戸時代は途中にあった番所の名をとって千国街道、また糸魚川方面からは松本街道ともいった。この道が青木花見、島新田を通り、追分から分かれて高瀬川を渡り池田に向かっていった。

原木戸の屋敷林

この地域の屋敷林は街道の両側に、ぽつぽつと散見される。途切れ途切れの屋敷林の間から、圃場整備された農地の向こうに望む北アルプスの眺めはすばらしい。しかし、JR大糸線の有明駅や安曇追分



街道沿いの白井宅



ハナノキ



強風で折れたモミの木



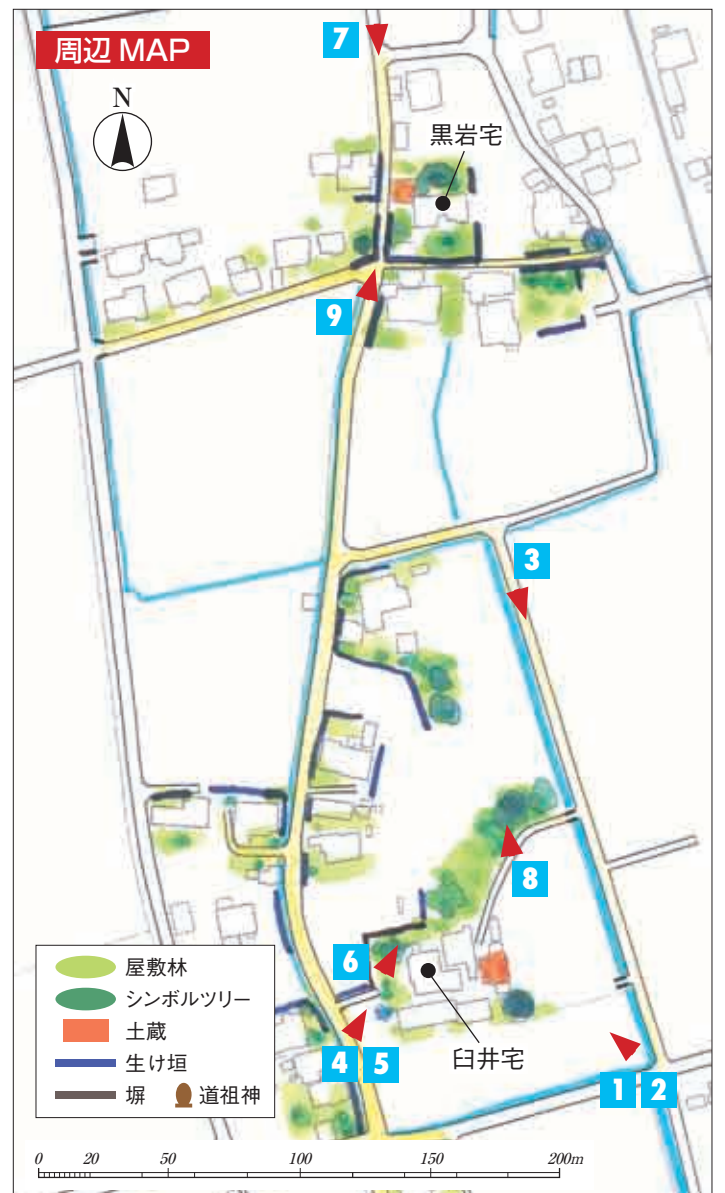
白井宅の庭



善光寺に献木されたというヒノキ



手入れの行き届いた黒岩宅 北側にあった樹木は新宅の建材に使われたそうだ



駅から徒歩圏に位置するので、新興住宅が増えつつあり、景観保護策が待たれる地域でもある。

街道沿いに植えてあったハンノキの大木が倒されたり、モミの木が折れたりするほど西風の強い地域でもある。

街道沿いの白井宅の西側にはハス池を中心とした前庭があり、その南西隅には環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に分類されているハナノキが植えられている。

とみた 1-7 富田 山裾に広がる屋敷林

安曇野市穂高有明



蝶ヶ岳のみえる屋敷林



金森宅の屋敷林とそば畑



金森宅には樹齢 200 年ほどのケヤキがある

富田村は江戸前期に烏川の氾濫原に開発された新田村である。松本藩の地誌『信府統記』には嵩下村^{たけのす}の枝郷から承応元年（1652）に分村したと見える。水利は烏川から取り入れた中沢と中房川から引いた富田堰により、現在は昭和38年（1963）に完成した烏川をサイホンで越す拾ヶ堰の用水も使っている。

明治以降は有明村を経て、昭和戦後穂高町となった。戦前までの80戸ほどの住宅が県道小岩岳穂高停車場線をまたいで「木戸」を構成している。中心地にはお宮の松の木で作られた小さな精米所があったが、現在は取り壊されている。隣には農協の大きな穀物倉庫が建っているが、時代の変化にともない他の企業に売却されて面影のみが残っている。

広域農道より東の県道沿いに平行して、戦後開拓地ができ、統一された家並みができたが、現在まで残っている家屋は少ない。それより南側に新しい住宅地ができ、現在では600戸以上の世帯数となって穂高では人口急増地帯である。

平成5年（1993）にはジャスコがオープンし、それを機に広域農道沿いは商店が立ち並び、大きな商



4 内山宅の生け垣を巡らす屋敷林



5 第1回穂高町景観賞(平成6年)を受賞した道 ブロック塀が生け垣になったことが評価された

業エリアとなった。富田地域は「木戸」を中心とした古いエリアと、戦後にできた新しいエリアとがはっきりと二分されている。

富田の屋敷林

戦前の80戸ほどの住宅をつなぐように通りができ、屋敷林も連続した景観となっている。西は妙教寺があり、南に伊夜比古神社が森を作っている。

中木戸の一部の道路拡幅を機に、道沿いのブロック塀が生け垣に変わり、平成6年に第1回の穂高景観賞を受賞している。屋敷林はスギ・ヒノキが中心だが、金森宅のケヤキは樹齢推定200年といわれている。

内山宅の屋敷林

富田地区の中心に位置し、敷地の北側に大きなケヤキが4本あった。古木のため枝が折れたり、落ち葉のこともあり、平成21年に伐採された。かつて板葺であった母屋は、築約150年の家を再生したもので趣がある。また長屋門の建築も美しい。

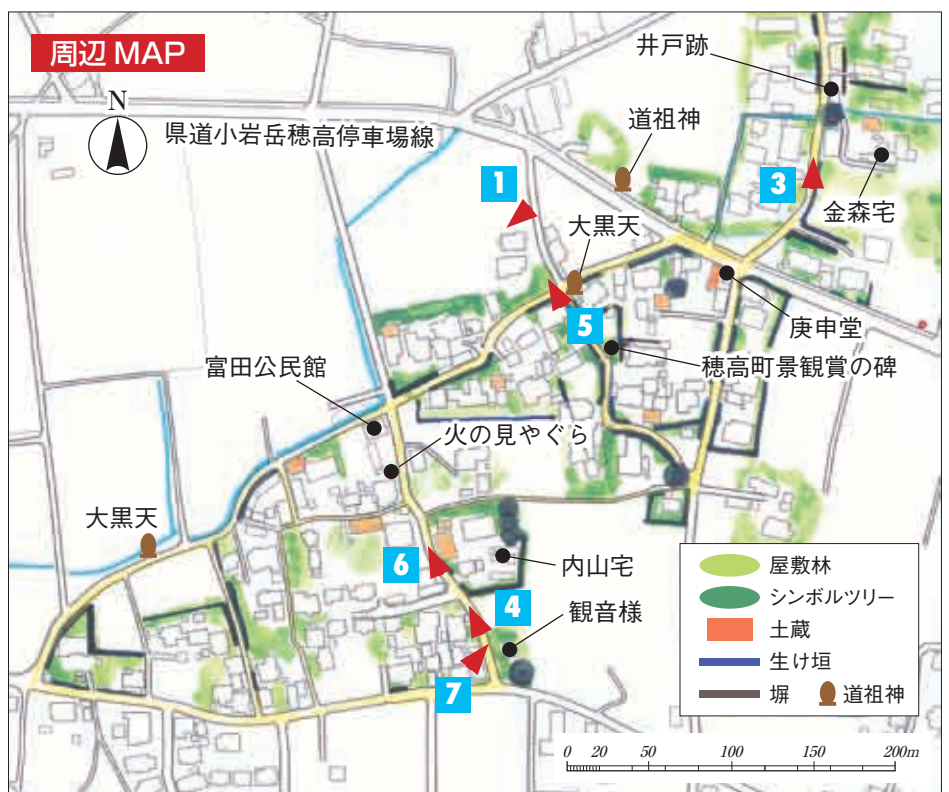
南側には「お観音様」と呼ばれる観音堂があり、サクラの古木が良い雰囲気のある場所である。



6 内山宅のケヤキは平成22年に伐採されもはやない



7 お観音様から見る富田地区の古いエリア



2 は地図外

1-8 きつねじま 狐島 小道の美しい屋敷林

安曇野市穂高北穂高



生け垣と屋敷林は小道の静かな景観をつくる



緑の小道は豊かな空間



細い小道は地域の生活道路

「狐島」の地名の由来には三説ある。一説は中世にこの近隣の地侍であった古厩氏・穂高氏・等々力氏・貝梅氏・渋田見氏の狐（監視者）がいた島（洲）という意味で狐島と名づけられたという説。二説目は、高瀬川・穂高川の氾濫原（洲・島）には藪林が多かったことから、狐が住んでいたのが狐島といったという説。三説目は、坂上田村麻呂に敗れた八面大王が白狐の姿になって逃げ、この地（川島の里）まで来て力尽き果てたので、村人たちは手厚くこれを葬り、村名を狐島としたという説である。

高橋宅の庭

安曇野高橋節郎記念美術館の南西約200mの所に湾曲した細い道が残されている。その両側は手入れの行き届いた高低、粗密さまざまなイチイ・ソヨゴ・カキツバタなどの生け垣で構成されている。その一面の落葉広葉樹が多い中に、常緑の広葉樹がほどよく配置されている美しい庭を持つ家が2軒並んでいる。ここはいわゆる屋敷林ではないが、すきま風対策、建材・燃料調達といった屋敷林の役割が少なくなった現代、「新しい屋敷林」（宅地緑化）の参



安曇野高橋節郎記念美術館と生家の屋敷林



生家の庭にある珍しい多行松



生家は民家再生され登録有形文化財として美術館の一部となる



寄棟茅葺の母屋

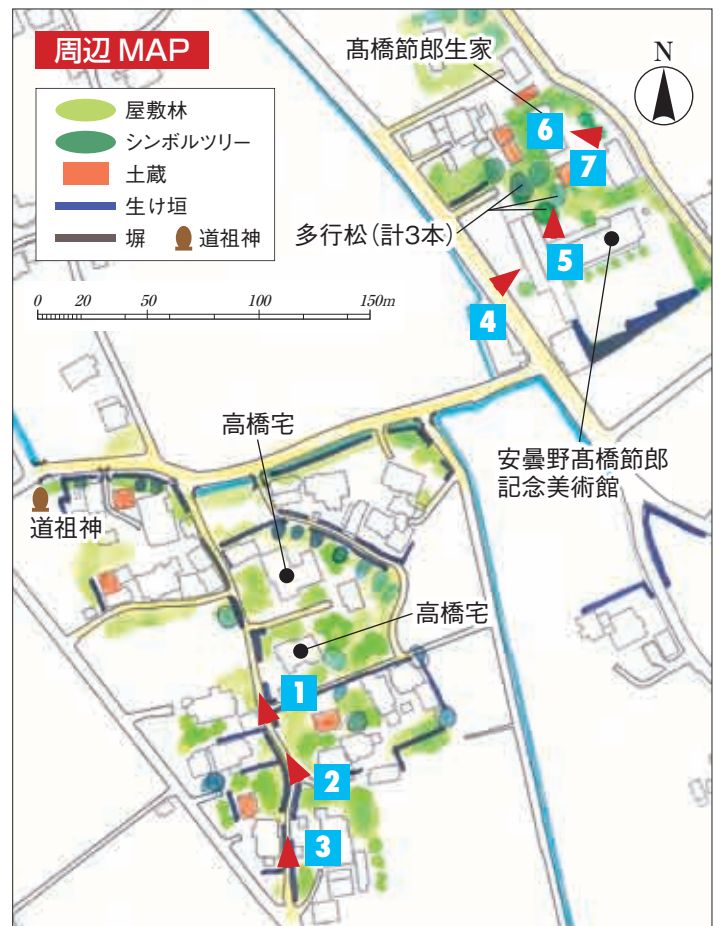
考になる庭である。

安曇野高橋節郎記念美術館

美術館は、穂高町（現安曇野市）出身の漆芸家高橋節郎の芸術を顕彰し、後世に伝える目的で狐島の高橋節郎生家に建てられた。生家の南東側に建ち、既存建屋、庭とは渡り廊下で結ばれている。

苔むした既存の庭には多行松（赤松の園芸品種）のほか、スイリュウヒバ・イブキ・イチイ・コウヤマキなどの針葉樹と、サクラ・カエデ・ウメ・ツツジ・カキなどの落葉広葉樹がほどよく配置されている。

茅葺の母屋は、江戸中期の創建と推定され、美術館開館に合わせて改修がなされた。母屋と米の一時貯蔵庫として使われていた「南の蔵」は生涯学習施設として利用されている。西側道路からのアプローチに使われた「蹴出し」、「馬車回し」として使われた古木も残っており、この地方の昔の農家のたたずまいに触れることができる。国の登録有形文化財に登録されており、屋敷林保護の一つの方法ではないかと考えられる。



1-9 荒神堂 シダレザクラの美しい高台の屋敷林

安曇野市穂高牧



1

広葉樹が多い寺島宅の屋敷林



2

古い土蔵が残る通り



3

寺島宅の長屋門前と屋敷林

荒神堂集落は、烏川扇状地北側の川窪沢川の段丘上に発達した集落であり、牧地区の北東部に位置する。

地名の由来は、大同2年(807)八面大王を退治した坂上田村麻呂が、堂宇を建立したうちのひとつと伝わる荒神堂があるからというが、むろんそれは伝承にすぎない。

集落の南側には栗尾山満願寺方面から流れる川窪沢川が流れ、集落の中央部には栗尾沢川が流れている。縄文時代の荒神堂遺跡があることから、古くから人が住んでいたことが知られる。荒神堂はかつては草深村に属していたが、元和3年(1617)に牧村が成立し、南を流れる川窪沢川を挟んで接していた牧村に編入した。近年は、眺望に優れていることもあり、暮らす人も増加した。

荒神堂の屋敷林

荒神堂は集落全体が屋敷林に覆われている。周囲には田園が広がっており、集落全体が田圃の海に浮かぶ屋敷林の島のように見える。

荒神堂の集落内には、土蔵や古い建物も多く見ら



4 南側より眺める荒神堂の屋敷林 高台に浮かんでいる島のように見える



5 隣あう屋敷の樹木 その間に水路が流れる



祀られた道祖神や大黒天



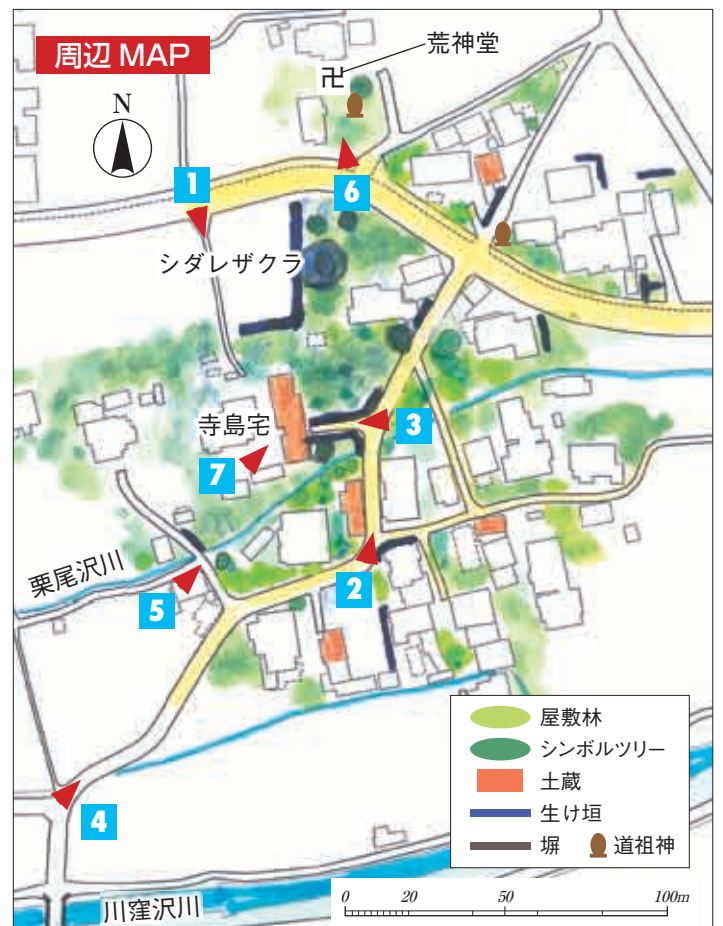
7 菊づくりにはケヤキの落ち葉が最高という (寺島宅)

れる。新設された道路が集落を迂回しているため、集落内を通る小道は細く、また湾曲していて、昔の面影がよく残されている。

集落は高台にあり、東側の安曇野一带、西・北側の北アルプス、南側の烏川沿いのアカマツ林などの眺望がすばらしい。

寺島宅の屋敷林

集落の中心に位置する寺島宅は、周囲を深い屋敷林で囲まれている。東側には長屋門があり、その周囲に竹が多く配置されている。門を入ると中は広く明るい。北と南に大きなケヤキがあり、庭では当主が菊づくりに励んでいる。ケヤキの落ち葉は肥料に大変よいとのこと。北側にはサクラや落葉樹も混ざり、春にはいっそう美しい屋敷林である。敷地内には土蔵、門、蚕室の三者が美しいバランスで建っている。



ほんごう 1-10 本郷 穂高のまちなかの屋敷林

安曇野市穂高



西側にはアルプスおろしの季節風を防ぐため高いスギの屋敷林がある



平林伊三郎宅のケミヤ（作業小屋）は珍しい稲藁葺の切妻屋根である（2 3）

本郷は、『延喜式』に見える穂高神社に由来する古代穂高郷の中心地（本郷）の意味で、中世穂高氏の居館が穂高神社の裏手（西側）にあった。

江戸時代には穂高宿を中心とした町分が保高町村として分かれ、本郷は保高村となった。明治期の東穂高村を経て、大正10年（1921）穂高町となり、昭和戦後の合併で周辺の村を合併した。

地勢は、扇状地の扇央にあたり水が乏しかったが、文化13年（1816）拾ヶ堰の開削により田中や上原が開田された。穂高神社の直属の氏子であるため、神社の東向きに対して、これを恐れ多いとして集落の各戸は南向きに建てられているものが多いともいう。

本郷の屋敷林

穂高駅の西側にあり、ホームから見ると北アルプスと民家の屋敷林と田園が美しい場所である。比較的交通量の多い県道と北側の生活道路の2本の道に面して集落がある。2軒の平林宅には高い杉の屋敷林があり、民家と塀が歴史を感じさせる。安曇野市福祉の里の側から西陽があたった屋敷林はなお一層美しい。



4 本郷の集落を抜ける道



5 北側から見た民家の塀と屋敷林



6 平林良介宅の庭

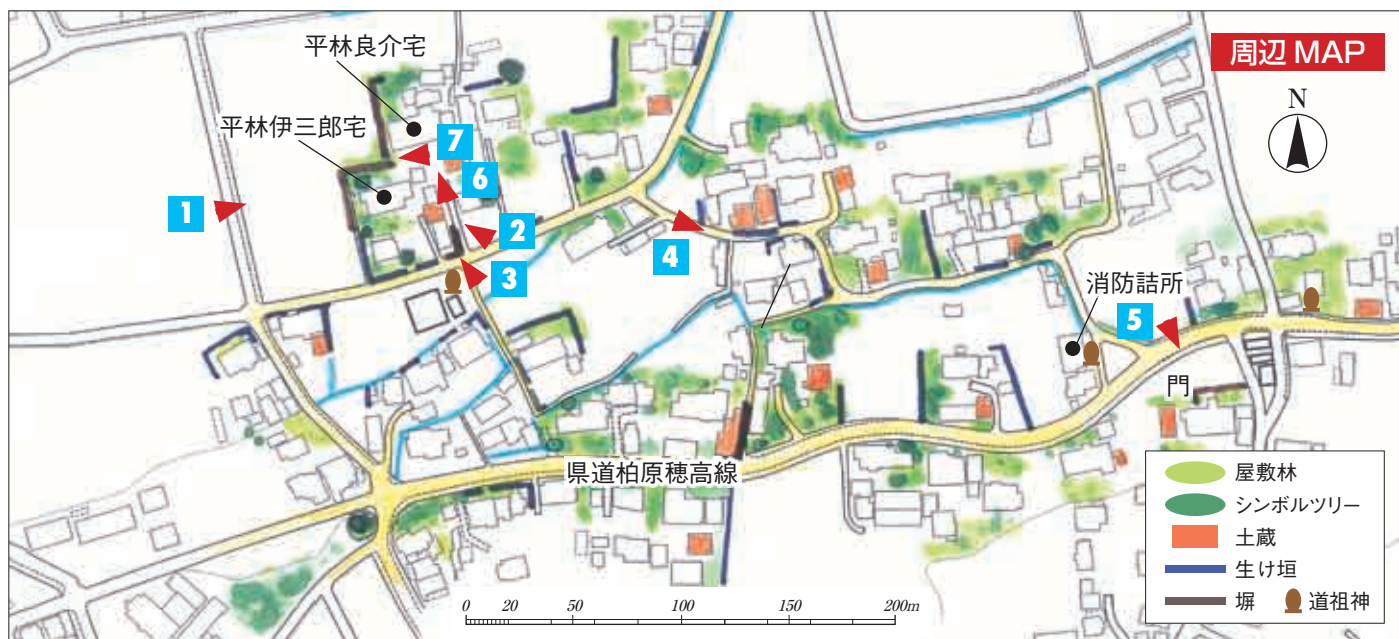


7 屋敷内から見た塀と屋敷林

平林伊三郎宅

平林宅の母屋は、明治20年ころ大町・松川の古材を利用して建設されたというが、一部二階建てで蚕室にも利用された。離れもあるが、夏は涼しいとのこと。戦後は20名ほどの人が疎開して暮らしていたという。

土蔵は曾祖父が明治17年に建設したことが梁の墨書で知られる。近年改築されて趣味の部屋になっている。ケミヤ（作業小屋）は土蔵より古く、この辺りでは茅は入手困難であったため、稲藁葺の屋根である。



とどろき 1-11 等々力 水郷に浮かぶ屋敷林

安曇野市穂高



大王わさび農場に向かう小道から北方を見る



穂高神社から流れる欠の川（矢原堰の流末） 三川合流地点に流れる



オリンピック道路から西を見る

烏川扇状地の扇端に位置するため湧水が多く、水郷地帯を形成している。欠の川（^{かけのかわ}矢原堰の流末）や穂高川が流れ、わさび田が多い。

中世の土豪に等々力氏が見え、周囲を川に囲まれた戦国時代の等々力城跡がある。集落内には道祖神が多く、辻々の6か所に双体像が祀られており、昭和50年のNHK朝の連続テレビ小説「水色の時」を記念した道祖神公園もある。

観光名所の大王わさび農場もこの地域に含まれ、平成9年に開通したオリンピック道路により車の流れもだいぶ変わったが、この地域から見る北アルプスと田園は安曇野を象徴する風景である。

等々力の屋敷林

旧家が多いので屋敷林も多い。一方このあたりはわさび田も多く、日照の確保のため常緑樹が少ない場所でもある。いたる所にわさび田を作った残土で小山が築かれ、この地域の特有な風景となっている。アカシアなど河川木の多い場所でもある

等々力家住宅

江戸時代の等々力村の庄屋を勤めた家で、松本藩



静かな町のたたずまい



等々力家住宅の屋敷林



望月宅（白金区）の屋敷林 礫山とゆかりのある家



道祖神や石仏を祀った辻



道祖神公園近くの欠の川



1 2 3 8 は地図外

主がこのあたりで鴨猟をする際は「御本陣」として休息所となった。母屋には殿様座敷があり、長屋門は安曇野市の有形文化財に指定。庭園は桃山様式をくむものといわれ、ビヤクシンは市の天然記念物に指定されている。屋敷の南西側に大きな屋敷林があり見事である。

1-12 しろかね 白金 文化の香薫る屋敷林

安曇野市穂高



北より見る白金地区 左端が厳島神社



2 相馬安兵衛宅の洋館内部



3 相馬宅の洋館と庭園 一般公開はされていない

烏川扇状地の扇端に位置し、集落は犀川の旧河床を流路とする万水川よろずいがわの自然堤防上に立地している。集落の周辺は低湿地で、湧水を利用したわさび田が広がっている。付近の三枚橋からは古墳時代から平安時代にかけての遺跡が見つかっており、古代からの水田が営まれた地域と考えられる。

中世の史料には、穂高神社の式年造営に白金郷が奉仕した記録がたびたび見える。江戸時代は白金村として一村をなし、明治期の東穂高村を経て、昭和戦後穂高町となった。

白金の屋敷林

田園風景の中にまとまった集落である。なかでも相馬安兵衛宅は、新宿中村屋の創設者・相馬愛蔵の生家である。相馬宅の屋敷林は、スギ・ケヤキをはじめとした多くの種類の樹木から構成されており、住宅の北西隅に多くが配置されている。住宅と屋敷林の間の庭や住宅南西側の庭も美しい。前者は日本式庭園、後者は刈り込まれた針葉樹の多い庭となっている。

相馬安兵衛宅

建物は南北に長く、南側は天井の高い洋風応接間



白金区で整備した湧水公園



奥が相馬宅の洋館と屋敷林



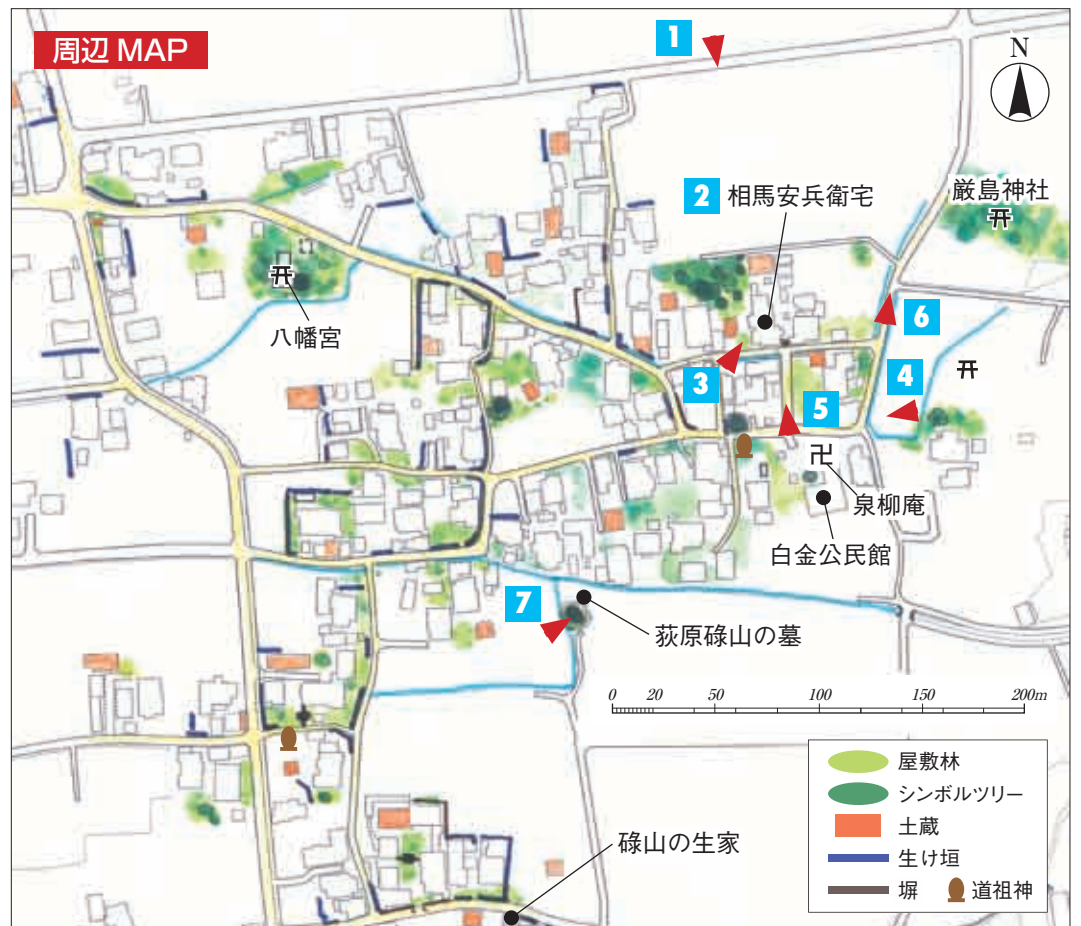
巖島神社



荻原碌山の墓からみる白金地区

となっており、相馬愛蔵や妻の黒光に関する資料が残されている。ここは白井吉見の小説『安曇野』の舞台となった建物で、彫刻家荻原碌山も時おり相馬宅を訪ねては相馬夫妻と談じていた。建物の北側は、日本式庭園に面した座敷となっている。

集落の東の段丘下には、相馬宅に骨接ぎの術を教えたという河童を祀った小祠の森があり、現在は巖島神社を祀っている。また、集落の南西には荻原碌山の生家と墓がある。



1-13 たなか 田中 拾ヶ堰沿いの屋敷林

安曇野市穂高



道祖神と田中の屋敷林 「文政七年」(1824)と刻まれた道祖神



二十三夜塔は女性たちの月待ち講で建てたもの



土蔵のある古い通りから常念が見える

田中は烏川扇状地の扇中央氾濫原上にあつて、古代・中世ころまでは穂高沢（本沢・殿沢）、中沢、芝沢などの自然流を用いてわずかに開拓されたものと思われる。

文化13年（1816）拾ヶ堰の開削により、田中の東半分は拾ヶ堰の水を主用水にするようになり、また拾ヶ堰開削により余力の生じた穂高沢などの水を利用して、拾ヶ堰より西（上段）の開発も進められた。

寛文2年（1662）の「保高組田中軒別書上絵図」には「千国道」の名称で、田中の西を柏原に向かう道が描かれている。穂高町における「千国道」の初見は文明15年（1483）の穂高神社文書である。

田中の名が示すとおり開発の遅れた地域であったが、江戸後期の拾ヶ堰の開削により一気に水田化が進んだものの、親村の保高村からは幕末まで独立することはなく、枝郷のままであった。平成16年「担い手育成基盤整備事業」も完了し、大型農業機械による稲作が可能になった。

田中の屋敷林

田中の屋敷林は拾ヶ堰に架かる田中中央橋、田中



伊藤敏雄宅の土蔵とまちなみ



拾ヶ堰の流れる屋敷林 左側は拾ヶ堰沿いの「あづみ野やまびこ自転車道」。



地下にある蚕種や桑の保管場所



すでに解体された繭倉



伊藤宅の繭倉 一部に糞を掃除する仕掛けがある。

南橋周辺に見事なものが多く残されている。個々の屋敷林は大きくはないが、旧家が多く、生け垣・土蔵も残されており、田中中央橋のたもとにある道祖神、遠望される常念岳や拾ヶ堰（並走するあづみ野やまびこ自転車道）と一体となって安曇野を代表する景観を形成している。樹種はスギ・ヒノキ・マツ・イチイなどが多い。

伊藤敏雄宅

伊藤敏雄宅は拾ヶ堰右岸にある。この付近は生け垣や板塀が多く、堰と交差する古道の雰囲気をよく残している。南側の舗装市道から宅内に入ると、南側に二階建の蚕室がある。現在車庫として使われている建物の地下には3間×3間の部

屋があり、室温が一定に保たれ蚕種の孵化時期の調整や、桑の保管などに使われていたという。西側には棟木に「万延二年（1861）築」とある土蔵がある。

樹木は主として西側に配され、西の拾ヶ堰側から見ると、手入れの行き届いた生け垣と樹木の奥に古民家がひととき美しく見える。



くぼた 1-14 久保田 栗尾道沿いの屋敷林

安曇野市穂高柏原



栗尾道沿いのたたずまい 手入れのゆきとどいた生け垣と屋敷林が美しい岡村宅



大きなケヤキの木と塀 屋敷が時代を感じさせる望月宅

「久保田」の地名は、窪んだ地形から称えられたといわれ、一時期村名として「窪田」の字があてられていたこともあったという。

地勢は、烏川右岸に広がる扇状地の扇頂付近に位置する。現在は水田が多いが、扇状地であるため水の確保が難しくカシワなどが生い茂り、山林原野の地であった。

元禄11年（1698）に柏原村の内原に開発が行なわれた。それは犀川から水を引く矢原堰の成立によっ

て、それまで矢原村が用いていた西山から流れる矢原沢の水に余裕が出たからと考えられる。農民たちが集落をつくり「当新久保田」（久保田新田）の名がしたが、幕末まで親村柏原村の枝郷であった。

集落内を栗尾道の一つである、豊科新田から牧の栗尾山満願寺へ登る道が通っている。成相新田宿の芝切（開発者）の後裔にあたる新田町村の庄屋の藤森与兵衛がこの栗尾道にたくさんの道標を建てた。

寺子屋師匠で謡の師匠でもあった安田庄司は、明治初期、研成学校の事実上の支校である西柏学校建設の先頭に立って尽力し、自宅を仮学校として使用するなど、柏原村新郷における寺子屋から近代学校への橋渡しをした。

久保田の屋敷林

久保田の屋敷林は、豊科から穂高牧の満願寺へ続く栗尾道の近くにある。栗尾道の変形五差路前の望月宅や、敷地の東側にケヤキがあり、北側には広葉樹・落葉樹のある屋敷林を持つ家がある。栗尾道よりやや北に離れて、大きなケヤキのある安田宅がある。この家の屋敷林は南側に多く配置され、敷地内



安田宅にある大きなケヤキの愛称は「トトロの木」



変形五差路のオープンスペース



栗尾道の住民の手作り看板がある



常念岳を望む望月宅の屋敷林

の樹種はケヤキが多いが、南側の小道のさらに南側の家の針葉樹と一体となって見える。

久保田の家並み

変形五差路の前にある望月宅は、交差点に面した東側に大規模な蚕室が建っており、東側から北側には美しい土壁と板壁で造られた塀がある。また、北

側には石垣や土手も設けられている。交差点に栗尾道の案内標識が立てられている。

大きなケヤキのある安田宅は、母屋は比較的最近建築されたものだが、美しい切妻屋根となっている。この家の南側を通る小道は、家の南西側で鉤の手に曲がっており、雰囲気が良い。



重文・曾根原家住宅

曾根原家住宅は、長野県内に残っている木造本棟造系の民家のうちでは最も古い建物であり、建築年代は定かでないが、17世紀中頃の建築と考えられている。

時の幕府の出した「慶安御触書」と同時期であり、農民の生活も住宅に厳しい制約を受けていた時代に、農民の住宅としてこのような規模の建物が建築されていたことは、当家が農民の中でも高い位置にあったことを示すものと思われる。

この建物の特長は、切妻屋根の^{ひら}平の側^{ひら}に入口がある^{ひら}平入の建築であり、また間取では表側の客座敷および裏側の寝室が本建（身舎）より突き出た形となっており、後世に完成する^{つまいり}妻入の本棟造の形式のように大屋根の中に収められていない。これは、本棟造の様式ができあがるまでの過程を示す姿として、江戸時代の民家研究には重要な建物である。

曾根原家住宅は、昭和48年6月国の重要文化財に指定され、昭和51年10月文化庁の指導により、建築当時に近い姿の解体復元修理に着手し、昭和52年12月完成した。



重要文化財・曾根原家住宅の外観



囲炉裏のあるオエ（居間）